

## 13 日本の近代化と上海

—もう一つの開国物語—

劉 建 輝

## はじめに

もし、東アジアの近代化を西洋文明との遭遇ないしはその受容の過程と見做すことができるなら、おそらく上海という町ほど、もっとも早く、かつ過激にそれを経験した場所はないだろう。一八四二年、大英帝国の「黒船」によって強制的に開港させられたこの港町は、以後二十年を経ない内に、その地政学上の優勢と「租界」という「国の中の独立国」の存在によってそれまで決して突出していたとは言えない一地方の伝統的な「県城」から、一躍、東アジアにおける欧米資本主義の最大の「基地」に申し上がった。その存在は、あたかもこの地域の真ん中に刺された一本の釘のように、ひとり中国内部に留まらず、直接、間接的に彼岸の朝鮮や日本にも甚大な衝撃と影響をもたらした。ある意味で、日本の近代資本主義が真に軌道に乗り始める十九世紀末まで、上海はあらゆる面において一貫して東アジアの「近代化」をリードし、その「策源地」的な役割を果たし続けたと言える。およそ阿片戦争から甲午（日清）戦争までの半世紀の間、西洋諸国はこの町を東方におけるみずからの文明の「最前線」と見做し、反対に東アジアの国々はそれを西洋に通ずるもっとも身近な「入口」と見做していた。そしてまさに「東西」交通の「中継地」のようなこの町を中心に、いわゆる東アジアの近代化、ひいては「東アジア」そのものの展開が形成されていったと思われる。

このような事情を踏まえて日本の近代化を考える時、特に日本内部に留まることなく、広く十九世紀の東アジア全体の歴史的動向の中でそれを考察する場合、その始動から展開に至るまでの多くの局面において彼岸の上海と深い関わりを持っていたことは、いかにも自明のこのように浮かび上がってくる。極言すれば、明治維新後はさておき、少なくとも維新前の日本の近代化への胎動は到底この上海という西洋の「基地」を抜きにしては語ることは不可能であり、そのほとんどがつねにいわゆる「上海ネットワーク」のもとで展開されていたと認められる。

これまで、日本の近代化について、あらゆる学問領域からそれこそ無数と言っていいほどさまざまな議論がなされてきた。しかし、その近代化の過程における上海の果たした役割について、あるいは両者の間に存在するあのいかにも自明な関係については、なぜか決して多くは言及されてはこなかった。そしてその数少ない言及もほとんどの場合あくまでそれぞれ独自の文脈の中で語られているに過ぎず、両者の関係を一つの問題意識として追求するようなまとまった論考は今のところ、まだ見出せない。

これらの事情に鑑み、筆者はここできわめて大雑把なアウトラインの提示に終わるかもしれないが、いくつかの角度からこの問題について、初歩的な整理を試みたい。そしてできれば、こうした具体的な史実の整理を通していささかでも両者の真の「関係」を突き止めることができればと思う。

### 一、情報発信地としての上海

いわゆる鎖国体制下の江戸時代において、日本の海外情報の収集ルートはおもに定期的に長崎を訪れるオランダ貿易船と中国貿易船の提出する二種類の報告書であった。それぞれ「和蘭風説書」「唐風説書」と呼ばれ、主として出島のオランダ商館長カピタンと中国船船主の手によって纏められたものだが、前者に中国近代の開幕とも言える阿片戦争の情報が初めて伝えら

れたのは、天保十一（一八四〇）年七月のことであった。同じ月に中国船からも戦況の詳しい報告が提出され、この衝撃的なニュースに驚いた幕府は以後両者に対していっそうの情報提供を求めつつ、わが身にも迫る危機感を抱きながら海のむこうの東西両大国の対決を見守り続けることになる。

「風説書」はもともと機密扱いで、老中など一部の幕僚にしか閲覧することが許されなかったが、翻訳と提出の過程で、有力な大名をはじめ、多くの藩にその写本が流れた。これらの写本を集録して、まとまった一冊の資料集として刊行されたのが、ほかならぬ『阿片風説書』（編者、刊行年未詳）『阿芙蓉彙聞』（塩谷岩陰編、弘化四年刊）などの阿片戦争の情報書であるが、一方、こうした戦況報告書は中国からも直接伝わってきて、「風説書」以上に日本の各方面に詳しい戦争情報を提供することができた。『英国侵犯事略』（中国船船主周諱亭等が弘化元年、長崎奉行に提出）『夷匪犯境録』（編者未詳、安政四年明倫堂刊本あり）、さらに『乍浦集詠』（沈実甫編、一八四六年刊）などのような詩集も、あるいはこの類に数えられよう。これらのルポルタージュ的なものに加え、また、そうした日中の情報を取り混ぜて、一種の歴史書や読本に仕立てたものも現れた。『鴉片始末』（斎藤竹堂、天保十四年作）『海陸戦防録』（佐藤信淵、刊行年未詳）『海外新話』（嶺田楓江、嘉永二年刊）などが、いわばその代表的な存在であるが、いずれもかなり広く流布しており、その種本とともに佐久間象三や吉田松蔭をはじめ、後のいわゆる維新の志士たちにすこぶる愛読された。

以上のこれら阿片戦争についての中国側の情報は、おおむね浙江省の乍浦を発信地とするが、この港町は早く明末からすでに唐船（寧波船）の出航地として知られ、数少ない対日貿易基地の中でももっとも重要な場所であった。しかし二百年以上も続いたこの対日情報発信地としての乍浦の役割は、阿片戦争が終結するやいなや新しい開港場としての上海にあっけなく奪われる。ある意味でこの対日情報発信地の乍浦から上海への移行は、つまりは中日関係の新たな時代の到来を象徴するものであり、そして前述の「上海ネットワーク」を踏まえて考えれば、それはまた日本の近代化の始動を告げる一つの「事件」とも受け止められるべきものであろう。なぜならば、もし「ネットワーク」という言葉をやや敷衍して解釈することが許されるならば、一八五三年、上海経由で日本へ出航したペリー艦隊の行動はまさにこの「上海ネットワーク」の成立をきわめて政治的、また軍事的に物語ったものとして理解できるからである。ちなみに当初幕府に開国を迫ったアメリカの第一目的も、ほかならぬアメリカ西海岸と上海との直線航路の中継地の確保だったのである。

「上海ネットワーク」の形成は、およそ租界の成立（一八四五年）とともに始まる。後に「国の中の国」と言われたこの治外法権を持つ外国人居留地に、創設後十年もたたないうちに五十社近い商社（洋行）をはじめ、さまざまな欧米の諸施設が進出し、外灘（バンド）を中心とする一角に限られはするものの、早くも近代都市の輪郭が整い始めた。商社などの経済分野はともかくも、いわゆる「上海ネットワーク」を情報や文化の面から成り立たせていたのは、これらの施設の中の新聞、出版関係であるが、中でも一八四三年の開港とともに設立された墨海書館と一八五九年に寧波から移転してきた美華書院（原名華花書房、一八四四年創立）は特にその中心的な存在だったと言える。それぞれイギリス教会とアメリカ長老会に属するこの

二つのミッション系出版施設はもともと聖書の印刷を目的として創設されたものだが、その後の事業展開の中で西洋事情を紹介する宣教師たちの漢文の著作や翻訳もかなり頻繁に出版されるようになった。ある意味で上海を発信地とする東アジアの情報ネットワークの成立は、いわばこうした宣教師たちの活発な著述活動によってまずその幕が切って落とされたと考えられる。

ペリー来航前後、日本の知識人にもっとも多くの西洋知識をもたらした書物が魏源の『海国図志』（一八四二年）であったことは、今ではほとんど常識となっている。しかしこの魏源の『海国図志』にも実はさまざまなタネ本があり、その中の重要な一つはアメリカ人として初めて中国で宣教活動を展開したブリッジマン（E. C. Bridgman）の著した『連邦志略』（一八三八年、原題『美理哥合省国志略』）だと言われている。この『連邦志略』の初版、第二版（一八四六）はそれぞれシンガポールと広州で刊行されたが、しかしその後上海に租界が整備されてくるとブリッジマンも早速十何年も住み慣れた広州を離れ、活動拠点をこの新天地に移している。ブリッジマンに代表されるように四十年代後半に入ると実に多くの宣教師が国内外からつぎつぎと上海に集まり、宣教活動はもちろん、それ以外にもさまざまな文化活動を繰り広げるようになる。彼らのこうした行動にはむしろいろいろ批判すべき点もあるが、ただその活躍で、中国ひいては東アジアの知識人がきわめて短期間に大量の西洋知識に接触し得たこと、また彼らとの交流で一種の疑似「西洋体験」を味わえたことはけっして否定できない事実である。

一八五〇年代、前述の墨海書館などの出版施設から刊行された一連の西洋事情ないし自然科学の書物、たとえば慕維廉（William Muirhead）の『地理全志』（墨海書館、一八五四年）『大英国志』（墨海書館、一八五六年）、緯理哲（Way Richard Quanterman）の『地球説略』（寧波華花書房、一八五六年）、偉烈亜力（Alexander Wylie）の『数学啓蒙』（墨海書館、一八五三年）『談天』（墨海書館、一八五九年）、合信（Benjamin Hobson）の『博物新編』（墨海書館〈ただし初版は広州〉、一八五五年）などは、およそ四、五年のタイム・ラグで、つまり一八六十年代の前半にだいたい翻刻か和刻本という形で日本で刊行されている。六十年代前半と言えば、たとえば日米修好通商条約批准の際の咸臨丸の渡米などにも象徴されるように、一方では安政以来の開国が着実に進みながらも、他方では開国によってもたらされた経済的な混乱とそれに由来する下級武士や一般庶民の不満が過激化し、国全体はいわば開国か攘夷かで大いに揺れに揺れを重ねた時代である。このような時期に宣教師たちのそうした西洋文明の細部ないしは本質を伝える漢文著書がつぎつぎと翻刻、出版されたことは、きわめて重要な意味を持っていると言えよう。それはすこし前の『海国図志』などの場合と違い、いわゆる開国か攘夷かの立場を越えたところで、社会全体に一種の自国文化、文明に対するより根本的な「危機意識」をもたらしたに違いない。明治に入ってからでもこれらの漢文著作がなおしばらく旧藩の各藩校、さらには新制の学校において教科書ないし参考書として採用され続けたことは、いわばその存在価値を逆の面から証明していると考えられる。そしてもし「情報伝達」ということにこだわって言えば、この一連の書物の伝えたものは、けっして従来の「蘭学」の単純な補充ではなく、時期的に見てもむしろ決定的な「衝撃」となったと言えよう。

上海情報ネットワークを成り立たせるものとして、以上の漢文著訳書のほかに、またいくつか宣教師たちの発行した漢字新聞や雑誌が挙げられる。『六合叢談』（墨海書館、一八五七年

一月創刊、月刊)『上海新報』(字林洋行、一八六一年十一月創刊、週刊、のち日刊)『中外雜誌』(刊行者未詳、一八六二年創刊、月刊)などは、いわばその代表的な存在であるが、紙数の関係で詳しい言及はまた別の機会にゆずる。ただこれらの新聞や雑誌も内容的には著訳書ほどではないものの、メディアとしての新しさという意味で、それらの書籍と同様、多大な影響を日本の知識人にもたらしたであろうということだけ、ここに記しておく。

## 二、日本進出基地としての上海

いわゆる「上海ネットワーク」は、むろん以上のような書物を媒介にした「情報」の流通のみから形成されたわけではない。書物の流布には及ばないものの、実は一部の人的移動もこの「ネットワーク」の成立に大きく貢献している。長崎などの開港を待ち切れなかったり、あるいは開港されるやいなやただちに活動拠点を上海から日本に移したりした冒険的な西洋人と、漂流してアメリカや香港、上海などでさまざま「西洋」を体験してきた漂流民たちが、これにあたる。前者には、たとえば長崎・グラバー邸で広く名前を知られているトマス・グラバーの例を挙げることができるし、また後者としてはいわゆるモリソン号事件で有名になった「にっぽん音吉」の存在を挙げることができよう。彼らはいわば生きた「西洋」として、あるいは長崎に入り、あるいは上海に留まりながら日本と「交渉」を持つことによってさまざまな局面で日本の「開国」を促し、またその「近代化」に寄与している。みずからの行動で日本に近代資本主義の「お手本」を示したり、あるいは日本を訪れる列強軍艦の通訳として両者の仲介を一身に引き受けたりその活躍ぶりは、ある意味で前述の書物などとまさにパラレルな関係でわれわれの言う「上海ネットワーク」を支えていたと考えられる。

後年、明治維新の裏の立役者と言われたトマス・グラバーが「海外雄飛」をめざして故郷のスコットランドを後に、極東の地・上海に渡ってきたのは一八五八年五月か六月頃で、彼はわずかに十九才であった。上海で、彼はまず当時この業界で最大の規模を誇った貿易商社、怡和洋行(ジャーディン・マセソン商会)に入り、いわゆる「極東貿易」の初歩を学んだという。ジャーディン・マセソン商会は、もともとスコットランド地方商人ウィリアム・ジャーディン(William Jardine)とジェイムズ・マセソン(James Matheson)の二人が一八三二年に広州で設立したもので、当初は主にインド・中国間でアヘン貿易と茶貿易を行っていた。アヘン戦争後、ジャーディン・マセソン商会は、まず香港に拠点を定め、上海の開港が決まるや一早く現地に支店を開いて、従来の商品取引を続けながら、後には造船や紡績、さらに運輸、保険など、生産はもとより流通・サービス部門にまで進出し、一時「商会の王様」と呼ばれた。十九世紀全般を通じての中国におけるイギリス資本の象徴的な存在であった。

このジャーディン・マセソンの上海支店においてグラバーは主に「通信書簡」の複写や「船荷証券」の作成などといった大手商社にお定まりの日常業務におよそ二年ほど従事した。後年の彼の事業展開ぶりから見れば、この間、彼は単に貿易会社の一般事務の経験を積んだだけでなく、おそらくジャーディン・マセソン商会的な経営方針ないしは「事業精神」についても大いにその真髄を体得したように思われる。上海滞在中のグラバーの具体的な活動については、残念ながらいまそれを記録した資料は発見されていない。しかしこの時点から彼はすでに「商

人」としての天性を十分に発揮しており、そしてその実績が会社内でかなり高い評価を受けていたことはほぼ間違いない。さもないとすればジャーディン・マセソン商会は当社の長崎代理人（当初は代理人補佐）としてこれから開拓すべき「新市場」である日本に弱冠二十一才の彼を送り込むことはなかつたらう。いずれにせよ、いわゆる「上海ネットワーク」への長崎、ひいては日本の参入を促した意味において、また、とりわけ後年上海ルートを通して大量の武器取引が彼を中心に行われた事実を考えれば、この若き商人の来日はまさしく幕末のもう一つの「事件」だったと言える。

ちょうどグラバーがジャーディン・マセソン商会上海支店でせつせとその「極東貿易」の経験を積んでいた頃、同じ外灘（バンド）に居を構えたもう一つのイギリス系大手商社宝順洋行（デント商会）におそらく彼と同様の「商会事務員」の身分で一人の日本人が勤めていた。通称「にっぽん音吉」と言われる人である。いわゆるモリソン号事件の当事者の一人として、のちに幕府にまでその存在を知られながら、生涯漂流民という宿命を背負い、ついに帰国の道を選ばなかった彼は、この時まさに「西洋」の一員になりきり、「開国」間近の日本を睨みつつそれとの「交渉」の最前線に立っていた。ある意味で、この音吉の存在ほど当時の「上海ネットワーク」と日本との関係を象徴するものはなく、また漂流以来の彼の足跡、特に上海に拠点を移して以後のその活躍は、そのままもう一つの日本開国物語の体さえをなしていると言えよう。

音吉ら十七人の乗組員を乗せた尾張回船・宝順丸が遠州灘で暴風雨に遭い、太平洋上に吹き流されたのは、天保三年、一八三二年の十二月である。その後海上で「十四ヶ月」もの漂流を続け、およそ一八三四年の二月頃にアメリカの西海岸に漂着したが、生存者は十七人中最年少の音吉と岩吉、久吉のわずか三人しかいなかった。当初、一時現地人に身柄を囚われた彼らは、運よくハドソン湾会社によって救出され、以後その会社の船でいったんはロンドンにまで連れて行かれ、そして漂流後ほぼ三年の月日が経った一八三五年の十二月に当時唯一の帰国ルートであった中国・マカオに送られてきた。マカオでは音吉ら三人は、宣教師の身分にありながら、同時にイギリス貿易監督庁中国語通訳官を勤めていたチャールズ・ギュツラフ（郭実獵）の世話になり、彼に日本語を教え、その新訳聖書の日本語訳を手伝いながらひたすらに日本への帰国のチャンスを待ち続けた。その間一八三七年三月におよそ一年半前にフィリピン・ルソン島に漂流していた九州出身の原田庄蔵、寿三郎、熊太郎、力松の四人もスペインの船でマカオに送られ、一同はギュツラフの家で思いがけない出会いを経験した。のちに世に言うモリソン号事件とは、つまりマカオで合流したこの七人の漂流民の送還を口実に日本との「交渉」を試みようとしたアメリカ商船モリソン号が天保八年、一八三七年七月に「異国船打払令」のためまずは浦賀、続いて鹿児島でも幕府の砲撃を受け、ついに「交渉」を断念せざるを得なかった顛末を指すが、帰国に失敗し、後髪を引かれるような思いでマカオに戻った彼らは、以後まさにこの異国の地で永遠の「漂流民」として各々の生きていく道を捜し求めなければならなくなった。

マカオでの自活を余儀なくされた七人は、まず尾張の岩吉と久吉が新訳聖書の日本語訳を手伝うために引き続きギュツラフのもとに残った。この二人は後にギュツラフの世話でイギリス貿易監督庁の通訳になり、阿片戦争勃発後彼に伴って占領下の舟山でしばらくの間勤務してい

たようだが、その後岩吉は一八五二年に不慮の死を遂げたらしく、久吉は一八六三年現在での福州在住が証言されているだけで、いずれもたしかな消息はわからない。

続いて九州の庄蔵ら四人のうちの三人は、モリソン号事件の当事者の一人であり、後にペリー来航の際にも日本語通訳として来日したサミエル・ウィリアムズに引き取られた。ウィリアムズは、当時マカオで「チャイニイズ・レポジトリイ」(「中国叢報」)誌の編集のかたわら、アメリカ海外伝道会の印刷所の運営をも引き受けており、彼らの世話をかって出たのは、おそらくみずからの日本語学習のためだっただろう。しかしこの三人のうち、熊太郎と寿三郎の二人はわりあい早い段階で死去したらしく、残る庄蔵だけが後に「仕立屋」として自立し、香港で日本人漂流民の帰国の世話をしながら元気に暮らしていたことが、少なくとも一八五五年頃までは確認されている。そして最後に残されたもっとも年少だった尾張の音吉と九州の力松の二人は、まずは音吉が一時渡米した後、四十年代初頭に中国に戻り、おそらくこの時点で入社したと思われるデント商会の上海進出とともにほぼ一八四四年頃からの「新天地」に移住している。また力松もしばらくは渡米したか、あるいはウィリアムズの世話でマカオの学校で教育を受けた後、一八四五年にウィリアムズの一時帰国に伴って、彼の保護下から離れたらしく、その後は一八五五年の時点で香港のある新聞社に勤めていたことが確認されている。

上海に移ってからの音吉については、残念ながらその活躍を直接、表立って記録した資料が残されていない。その意味で上海における彼の具体的な活動を知ろうとしてもほとんど不可能に近い。しかし幸い、イギリスと幕府の大切な「交渉」の場に幾度か通訳としてその姿を現わしたおかげで、そうした記録から間接ながら彼のその後の様子を少しはうかがい知ることができるのである。以下、簡単ながらそれを中心に見てみることにする。

音吉がモリソン号事件以後初めて日本を訪れたのは、一八四九年五月二十九日のことである。江戸湾と下田港の測量を目的に来日したイギリス軍艦マリナー号に通訳として乗り込んでいた彼は、この時みずから中国人と称し、名を林阿多と偽った。そして浦賀の役人の問いに対し、自分が唐国上海のもので、今回はイギリスに雇われて参上したのだと答えている。しかしマリナー号がその後六月七日日本を離れるまで幕府側に頑なに上陸を拒絶され、両者の間でついに交渉らしい交渉を持ち得なかったため、通訳としての音吉についてもいくつかの肉体的特徴以外にあまり記録は残されていない。ただこの短い交渉期間中に、音吉は終始列強と日本の間に立つ自分の仲介的な立場に敏感だったらしく、またその言葉のはしばしから「案内者」としての自分をなんとかして弁明しようとする姿勢も見受けられる。これらはまさに逆の面から上海から来たこの「日本人」のこうした「交渉」における独特な立場とその重要性を示すものであろう。

一八五四年九月、音吉はイギリス極東艦隊に従ってもう一度日本—長崎にやってくる。司令長官サー・ジェームス・スターリングに率いられた極東艦隊の来航は、もともとクリミア戦争で対戦国となったロシアのプチャーチン艦隊の動静をうかがい、かつこの戦争における日本の中立的な立場を求めることが目的だったらしいが、幕府側の誤解により、その交渉がいつの間にか通商開国をめぐるやりとりとなり、最終的には両者の間で日英和親条約を結ぶ結果となったのである。この一部始終にわたって双方の間に立ち、その仲介を一身に引き受けたのがほか

ならぬ、臨時に上海から雇われてきた音吉であったが、今回は彼はみずからの出身を明らかにし、また自分の「通訳官」としての立場にたって自覚的な態度で最後まで「イギリス側」の一員として振る舞ったと伝えられている。たとえば幕吏の質問に対し、自分が「尾州名護屋裏町茂右衛門侍」で、モリソン号事件後、一時アメリカその他諸処をまわったが、中国で「イギリス商館」に雇われてもう十年になると答え、その帰国勧誘に「上海に妻と子供たちがいるので、英国旗の保護下にいた方がいい」（春名徹『にっぽん音吉』〈晶文社、一九七九・五〉、なおその他の音吉に関する記述もおおむねこれによる）ときっぱり断ったという。

音吉のこのような毅然とした態度は、当然日本側の強い不信感を買ひ、また「至極日本ヲ見下候体」で、「日本人でありながら外国人の利益を計る者」という印象を与えたようである。しかしそれらに対しても、彼は前回とは打って変わって終始泰然と振る舞い、自分のそうした「案内者」的な立場を一言も弁解しなかったという。音吉のこの自信に満ちた態度は言うまでもなく主として十年間にわたる「イギリス商館」勤めで獲得した「国際感覚」によるものと思われるが、一方彼はいわゆる「上海ネットワーク」における自分の役割についてもどうやらかなり明確にわきまえ始めていたように見受けられる。臨時に雇われたとはいえ、あるいはこの時点の彼の心中には、もうなんとかしてこの「近代」を代表する「ネットワーク」の中に日本を引き入れようとする認識さえ生まれていたのかもしれない。その意味で、音吉のあくまで西洋人の「手先」として振る舞い続けたその毅然とした言動はまさにこの「上海ネットワーク」の内部にみずからの「存在価値」を獲得し、一足先に日本を離れた「先駆者」のものであり、また帰国を拒まれ、生涯異国で「漂流」しなければならない一人の漂流民の祖国日本に対するせめての「恩返し」だったとも言えよう。ちなみにこの種の自覚は彼の仲間の力松にも見られ、エリオット提督の率いるイギリス遊撃艦隊に従い、また日英和親条約批准書交換の際にはスターリング艦隊の通訳として、箱館と長崎に二度来日した彼の言動には、紛れもなく音吉と同質の「我儘」が確認できるのである。

### 三、西洋への「入口」としての上海

およそ以上のような日本進出の中継地としての役割とは裏腹に、十九世紀半ばまでは上海はまた同時に日本の「西洋」に通ずるもっとも身近な「入口」でもあった。それは租界を持つ上海に列強のすべての「出先機関」が揃っているという意味においてもそうであるが、より現実的には、この時期まだヨーロッパへの定期航路を持たなかった日本にとって、上海はいわばそれら「夷狄の国」へ出ていく際のもっとも近い「出発港」だったのである。現に明治維新前後までに幕府と各藩から派遣された遣欧使節団と留学生の多くは、この上海の港で定期便に乗り換え、ヨーロッパに向かっている。その意味で上海体験はつまりは「西洋体験」の第一歩であり、そこでの見聞はのちのち彼らの行動にきわめて大きな影響を与えることになったと思われる。

たとえば、文久三（一八六三）年五月、諸藩の中で最初の海外留学生と言われた長州藩の井上馨、伊藤博文ら一行五人は、イギリスへ向かう途次、短い上海滞在を経験している。出発前、激しい攘夷意識を抱いていた彼らは、滞在中バンドの前に浮かぶ列強の軍艦を見、また租界の

繁栄ぶりを目にして、「従来の迷夢頓に覚醒」（中原邦平編述『井上伯伝』、明治三九）し、無謀な攘夷の愚かさを悟ったと伝えられている。

また、翌年の文久四年一月、いわゆる横浜鎖港談判の目的で派遣された池田長発遣使使節団の一行も「仏国郵船」に乗り換えるため上海に一週間ほど滞在している。その時彼らは当時もっとも豪華であると言われていたイギリス系ホテル「アスターハウス」（礼查飯店、一八五二年創立）に泊り、そこで生まれて初めてのフルコースのディナーを味わったり、ピアノを楽しんだりして、まるで「仙境に入るの懐をした」（尾佐竹猛『幕末遣外使節物語—夷狄の国へ』、講談社学術文庫、一九八九・十二）という。一行はまた当時日本ではきわめて珍しかった写真館やその他租界にある西洋の諸施設をも見学し、中には今後の行動に便利だと言って高額をはたいて靴を買った団員もいたとされている。

この他に、慶応二年（一八六六）十月、川路太郎、中村正直ら幕府派遣イギリス留学生の一行と慶応三年一月、パリ万博へ派遣された民部大輔徳川昭武ら遣使使節団の一行も、それぞれ短いながら一時上海に逗留している。前者には、のち教育者、外交官として名を馳せた若き外山正一や林董も加わっており、彼らは上海で西洋への第一歩としてチョンマゲを切り、その姿を全員一同記念写真に収めている。

残された記録が限られているせいもあって、以上の幕吏や留学生たちの上海体験はあるいは初めて海外に出た人のごくありふれたそれのように見えるかもしれない。しかし、上海滞在中、あるいはヨーロッパに着くやいなや彼らが早々に従来の攘夷の立場を捨て、一様に「開国論」に転じたことを考えれば、この最初の「衝撃」の意味をけっして軽んじることができない。井上馨などに象徴されるように、ここでの見聞はいわば国内の開国か攘夷かの矛盾を解消させ、究極的な「攘夷」のための開国の必要を認識させるのにきわめて重要なきっかけを与えたと思われる。一方ホテルや写真館など、言ってみれば西洋文明の「裾野」の部分の体験も感覚的な認識の第一歩としてのちのち彼らの西洋理解ないしは自国文明に対する反省に少なからぬ影響をもたらしたであろうと考えられる。ある意味で短い上海滞在とその後のヨーロッパまでの長い船旅はまさにこの激しい「衝撃」を消化し、真の西洋認識を育む過程だったと言えよう。

西洋の「入口」としての上海の意義は、むろん単に以上のような渡欧途次の中継地としての役割に留まらない。さまざまな近代的「機能」を持つ西洋の「基地」として、その存在自身にも日本の各方面から多大な関心が注がれた。上海に来てその状況を調査することは、いわばそのまま「西洋事情」についての一種の「探索」であり、また「半植民地」としてのこの土地の情報そのものもいわゆる「開国」と「攘夷」—それぞれ二つの道を模索している幕府と倒幕志士たちにとってぜひとも必要なものであった。その意味で幕府がイギリスの商船、アーミスティス号を買上げた後、ただちにそれを「千歳丸」と命名し、幕吏などを乗せて上海に派遣したのは、考えてみればまさにそうした「需要」に答えるためであり、またその計画を知った各藩がすばやく反応し、それぞれ有力藩士を選んでその視察に同行させたのも、およそ同様の思惑を持っていたからにはほかならない。それはたとえばこの一行のメンバーに高杉晋作、中牟田倉之助、五代友厚、名倉予何人などのちのち維新運動の中できわめて重要な役割を果たすことになる若い志士たちが多数加わっていることから、容易に推察できよう。

水夫なども含め総勢五十一名の千歳丸上海視察団一行は文久二（一八六二）年四月二十九日に日本、長崎を出発し、およそ一週間の航海を経て、五月五日に上海に到着した。上海の土を踏むやいなや各々の使命を負わされた志士たちはただちにその「任務」を遂行すべく、それぞれの立場からこの西洋の「基地」に対する「探索」を開始した。彼らが来訪した当時、上海はちょうど太平天国の乱で農民軍の包囲下にあり、すぐ郊外では政府軍と太平軍が激しい戦闘を交えながら睨み合っていた。そのようなこともあったせいも、上陸後の志士たちがまず関心を示したのは、そうした両軍の交戦状況と政府軍側の様子、特にその応援のために派遣されてきた英仏駐留軍の様子であった。たとえば到着後三日目に高杉晋作は一早くその日記に「五月七日、払暁小銃声轟于陸上、皆云、是長毛賊与支那人と戦ふ音なるへし、予即ち以為く、此言信なるは、実戦を見ることを得へし、心私かに悦ぶ」（『上海掩留日録』）と記している。高杉に限らず、逗留中の志士たちの日記を繙けば、このような記事は他にも随所に発見できる。ここには彼らの武士としての職業的な興味と英仏軍も参加した近代戦争に対する現実的な関心とが同時に読み取れるだろう。

上海滞在中、志士たちはやはり何よりも西洋人との接触とさまざまなルートを使っての情報収集にいちばん力を入れた。高杉晋作は五代や中牟田などと連れ合せて四回（うち二回不在）も「ミュルヘット」（慕維廉）を訪ね、彼から西洋や上海の状況をうかがったり、本を求めたりした。一方中牟田も前後二回にわたってデント商会を訪れ、音吉に面会しようとしているが、あいにく彼が休暇でシンガポールに行っており、ついに滞在中に会うことはできなかった。これらの「西洋人」に留まらず、志士たちはまた中国の人々とも広く交わり、街頭の「書坊」にも頻繁に出入りして、できるかぎり戦乱下の中国の実情と西洋に関する情報や書籍を漁ろうとした。たとえば高杉や名倉などはかなり積極的に現地の軍人と接触し、中でも陳汝欽という下級士官を何度も訪ねて、筆談の形で彼と「中外」の情勢について意見を交換した。そして彼らが上海で購入した書籍にいたっては、たとえば先にも一部言及した『地理全志』や『大英国志』『連邦志略』『数学啓蒙』などの「名著」の外に、『六合叢談』や『上海新報』のような新聞雑誌、さらには『清国英国条約書』のような外交書類まで含まれており、その種類と数は実に枚挙にいとまないほどである。

千歳丸の一行は上海訪問中、もう一つの「任務」としてさらにその商業や貿易状況についてもかなり詳しい調査を行なっている。単に幕吏が上海道台（知事）やオランダを始めとする各国領事館に直接質問し、その手続きや方法を詳しく聞き取っただけに留まらず、志士たちはまた租界内にある各国の商会を直に訪問し、一種の「現場見学」までしていたと思われる。たとえば五代友厚や高杉晋作、中牟田倉之助などはいずれも一度ならず租界の商会を訪ね、近代ビジネスの方法について多大な関心を示している。五代などはさらにこれらの商会と直接交渉し、薩摩藩のために売値三十万ドルのドイツ蒸気船ジョージキリー号を十二万五千ドルで買い取ることに成功し、内外の人を驚かせたと伝えられている。

千歳丸の一行は上海でおおよそ二ヶ月逗留した。その間、彼らは以上のような情報収集や「外情」探索などの面で多大な成果を収めた。しかし二ヶ月間の滞在を通して志士たちが手にしたものはけっしてこれらの進んだ西洋文明の「情報」だけではなかった。文明の先進性とともに

彼らはまたその背後に隠されている近代西洋の植民地主義をも発見した。これはいわば「西洋」の内部では容易に意識されない、半植民地としての上海でこそ顕在化された西洋近代のもう一つの特性である。おそらくこの西洋近代の両義性の発見こそが志士たちの上海滞在の最大の収穫だったと言えよう。また、それは精神の根底から彼らに大きな意識転換をもたらすことにもなった。

たとえば、高杉晋作は上陸後まもなくもうすでに西洋人と中国人の間に存在する「使役」と被使役の関係を見出し、その日記に「実上海之地雖属支那、謂英仏属地、又可也、北京去此三百里、必可存中国之風、使親近及此地、嗟亦可為慨嘆矣、困憶、呂蒙正諫宋太宗、以親近不及遠、豈不宜也、雖我邦人、可不須心也、非支那之事也」(『上海掩留日録』)と記している。帰国後彼が身分制度を打破し、「奇兵隊」という一種の「国民軍」的な組織を作り出したことに象徴されるように、おそらくこの時点から高杉はいよいよ強大な近代西洋の植民地主義に対し、いわゆる「国民」全体の力で防衛するしか中国の「覆轍」を踏まずにすむ道はないと考え始めたのだろう。「雖我邦人、可不須心也、非支那之事也」との慨嘆からは、まさにそうした認識の小さな「芽」が読み取れる。この小さな認識の「芽」が大きく育ち、高杉を始め多くの維新志士に「ローカリズム」から「ナショナルリズム」への意識転換をもたらし、さらには彼らに近代国家(ネーションステート)の観念を植え付けるまでにはそう時間はかからなかった。そしてその最終的な開花こそが六年後の明治維新にはかならなかった。その意味で、五代友厚の後の「貿易立国」などの実践も含めて、志士たちの二ヵ月にわたる上海滞在は、彼らのその後の近代国家意識の成立にとって欠かすことのできない、きわめて貴重な体験だったと言えよう。

### おわりに

以上、われわれは人と物の二つの面から、いくつかのトピックを通して日本の近代化運動と上海との関係について概括的に論じてきた。これらの史実は一見して明治以降の「富国強兵」としての近代化とあまり関係がないように思われるかもしれない。しかしもしわれわれが「近代化」というものをそうした狭い視野で捉えるのではなく、十九世紀半ば以来すでに東アジアで始まった一つの精神運動ないしは文化運動として考えてみるならば、それは潜在的にこれらの上海事情ときわめて複雑な絡みを持っていたことが明白になってくる。これまでわれわれは近代化運動を考察する際に、どちらかと言えばしばしば表面的、あるいは運動と直接関係のあるものだけを議論の対象にしてきた。しかし以上で確認したようにそうした一部の潜在的な、あるいは運動とはかならずしも直接関係のない要素もけっして軽んじることはできない。極端な言い方をすれば、かりにいわれる「上海ネットワーク」というものが存在しなかったら、おそらく日本の「近代化」はけっしてこのように迅速に、またこのように整合的な形で歴史の上に現れなかっただろう。

(了)